

第16回

小さな助け合いの物語賞

「私も見つけた、小さな助け合い。」
あなたの体験をストーリーにしてみませんか。



どなたでも応募できます
エッセー
作文
募集

応募
期間

2025年 6月1日(日)～9月5日(金) ※9月5日(金)必着



上位入賞作品

あなたの作品が
パラパラ漫画になります!

中面で
過去動画を紹介
しています。



学校からの団体応募には、
参加賞をプレゼント

Shinkumi Bank

信用組合

しんくみ

ちかくにいるから、
チカラになれる。

協賛：全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金
後援：金融庁・文部科学省・金融経済教育推進機構

“しんくみバンク”信用組合は「助け合い」から生まれた金融機関。
この懸賞作文を通じて「助け合い」の心が広まることを願っています。

第16回「小さな助け合いの物語賞」 エッセー・作文募集

テーマ

実体験をもとにした「小さな助け合い」

- 誰かに助けてもらったときの感謝の気持ち
- 助けたことで得られた豊かな心

(家族や知人、同僚など身近な関係での助け合いは対象外となります)

文字数

800～1200文字

応募期間

2025年6月1日(日)～9月5日(金)

※9月5日(金)必着

応募方法

- WEB応募フォーム: 応募特設サイトより応募ください。
- 郵送・メール: 専用の応募用紙を作品と併せて応募ください。

※応募要項・応募用紙・WEB応募フォームは応募特設サイトに掲載しています。

一般社団法人
全国信用組合中央協会
応募特設サイトはこちら



応募先

郵送

〒105-7208 東京都港区東新橋1-7-1 汐留メディアタワー 8F
「小さな助け合いの物語賞」応募事務局

メール

tasukeai@shinyokumiai.or.jp
メールタイトルは「助け合い応募」としてください。

！
郵送・メールによる
応募の際は、
必ず応募用紙を
添付してください。

賞の種類

しんくみ大賞

最優秀賞

1編／賞状・副賞(商品券20万円分)

しんくみさな賞

優秀賞

1編／賞状・副賞(商品券10万円分)

作品賞

未来応援賞※

青少年を対象に、今後の人生のプラスとなるような出会いや助け合いを描いた作品

2編／賞状・副賞(図書カード5万円分)

※未来応援賞は、18歳以下(2026年3月31日時点)に贈られる賞です。

ハートウォーミング賞

助け合いから生じる人に対する思いやり、やさしさが感じられる作品

最大15編／賞状・副賞(商品券1万円分)

学校賞

徳育奨励賞※

応募数の最も多かった学校

1校／賞状

※徳育奨励賞は多くの学校に受賞機会を設けるため、受賞は1回限りです。

選考・発表

審査結果は10月中に主催社ホームページにて入賞者の作品・氏名を発表します。
上位入賞者は10月17日(金)に東京で行われる全国信用組合大会で表彰します。
(徳育奨励賞も含む)

注意事項

応募要項の注意事項をご確認のうえ、応募ください。

主催

一般社団法人 全国信用組合中央協会

協賛

全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金

後援

金融庁・文部科学省・金融経済教育推進機構

信用組合使用欄

物語をあなたに お届けします。

昨年の受賞作品2編をご紹介します。
誰かが誰かを助けた小さな「物語」が、
あなたの心を温めてくれたなら、
次はあなたの「物語」を届けてください。

上位入賞
作品

あなたの「物語」が
パラパラ漫画になります！

しんくみバンク公式YouTubeチャンネルで公開！

しんくみ大賞

声かけはエール

しんくみきずな賞

白杖の女性と
大阪のおばちゃん

パラパラ漫画の
動画再生リストはこちら



しんくみ大賞

声かけはエール 原口 眞帆

「こんにちは。」

「調子はどう？」

病院の地下、薄暗くてはじめは何だか怖いなんて
思っていた場所も、毎日同じ時間、同じ顔触れだか
ら、いつの日か楽しみな場所になった。楽しみ、という
表現は適切ではないかもしれないけれど、病室から
出られない日々を思えば、この放射線治療病
棟は唯一、私が小児病棟
から出られる「お出
け」の時間だった。

私は、小学五年生の
時に脳腫瘍が見つかり
手術・治療の為、約九か
月入院をした。これは
その入院中に出会った、
名前も知らないおじさ
んとおばさんとの話だ。
放射線治療は、一度に



たくさん量を照射することが出来ない。毎日少し
ずつ照射する。そのため毎日、決められた時間に治療
室に向かう。待合室には、いつものメンバーだ。
私が治療を受けていた二〇二二年は、未知のウイル
スが猛威を振るっていた、コロナ禍だった中だった。
ソーシャルディスタンス、懐かしくも思えるこの言
葉。私たち患者は免疫が落ちていたため、人との接触
に人一倍気をつかい、人と距離を置かなければならな
い、家族にも会えない入院生活だった。

そんな中、私の「お出かけ」放射線治療。私の治療の
時間は、他の子供は一人もいなくて、そこで会う患者
は全員大人だった。毎日顔を合わせれば、あいさつを
するようになるし、声をかけ合うようになる。

「おじょうちゃんが頑張っているから、おじさんも
頑張るよ。」

「あと何回治療はあるの？一緒に頑張ろうね。」

「お互いあと少しですね！頑張りますしよ。」

このやり取りで、どれだけ私の気持ちの軽くなった
か。お互いエールを送ることで助け合っていた。孤独に

なりがちな入院生活だったけれど、コミュニケーション
を取ることは、年代を超えて出来るのだ。コロナ禍
で、人との関わりが希薄になりがちな日々だったから
こそ感じた、人との関わりの温かさ。
助け合いって難しいことではなくて、声かけ一つで
出来てしまうと思う。あの時のあいさつ、互いに送っ
たエールを今でもたまに思い出す。

おじさん、おばさん、私、治療を終えて、退院した
よ。中学生になったよ。あの時、笑顔で声をかけてく
れて勇気がわいたよ。

いつかまた会えたら、伝えたい言葉がたくさんあ
る。話したいことがたくさんある。想いを寄せる人が
いることは幸せなことだ。

私の笑顔、あいさつや声かけが、
誰かへのエールになると信じて。

「こんにちは。」

「どうしたの？」

声かけの出来る人でいたい。



しんくみきずな賞

白杖の女性と大阪のおばちゃん 松木園 紗絵

電車で帰宅途中の出来事です。その日は出張から
の直帰で、いつもより早い時刻の電車に乗ってしま
した。夕方の早い時刻とはいえ、座席は満員で、混雑し
ている車内。出張疲れの中、自宅の最寄である終点駅
に向けて走る電車で揺られていました。

あと三駅で終点駅、というところで、白杖を持つ若
い女性に乗ってきました。私は邪魔にならないように
出張の荷物を脇へよけたり、体位をよじったりして私
なりにその女性に配慮したつもりでした。ちょっとで
も女性が快適に乗車できるように、と。その時、私の
背後から年配の女性が声をかけました。「白杖のお姉
ちゃん、吊革ここよ、ここしつかり持つんやで。」白杖
の女性はびっくりしながらも、「ありがとうございま
す。」とはかみながら会釈しました。年配の女性は
続けます。「おばちゃん、おせっかいかもしれへんけ
ど、ほっとかれへんわ。あと一駅で降りるけど、できる
ことあったらなんでも言うんやで。」すると、白杖の女
性が軽く嗚咽をもらして、こう答えたのです。「お

せっかいなんかじゃありません。私、いつもこの電車
に乗るんですが、こんなに優しい声掛けをしてもらっ

たのは初めてです。私、全く目が見えていなくて、み
なさん気を遣ってくれたりしてるんだと思うんです
けど、直接その優しさを感じられて嬉しかったで
す。」と。

私は、自分なりの配慮が白杖の女性には伝わって
いない、自己満足であることを恥じました。同時に、で
きることはないか聞く、という「大阪のおばちゃん」の
行動力に「温かい」を通り越して「熱い」ものを感じ、
疲れていた私も活力がみなぎりしました。気づいたら、
私は女性に声をかけていました。「終点駅まで乗るよ
うでしたら、私が改札まで案内しますよ。」と。

白杖の女性は私の声に振り向くと、満面の笑みで
「終点まで乗ります。いつも一人なんで、今日はお願
いしよかな。」と言ってくれました。もしかしたら、本
当におせっかいだったかもしれない。でも、声をか
けなければ、私の気持ちも伝えられなかったかもし
れません。私の「形に見える思いやり」に背中を押し
てくれたおばちゃんは、「あなたもええ子やな。ほな、
頼んどくで。」と私に手を振り、一足先に下車しまし
た。私は、女性と「顔を見合わせて」「ふふっ」と笑いな

ら、おばちゃんに「ありがとうございました」と一礼し
ました。顔を見合わせているその女性に私の姿は見
えていないかもしれませんが、たしかに、お互いの心
は通じ合っていました。
改札までの短い時間、私たちはたわいのない話をしな
がら、一緒に歩きました。改札で別れる時、女性に言わ
れたこの言葉、そして笑顔が今でも疲れを飛ばしてく
れるくらい私の胸
を熱くさせてくれ
ます。「今日が今ま
で一番楽しい通
勤時間になりました
た。ありがとう。」
二人の女性から
たくさんのお話を
教わった、私の大
切な思い出です。



他入賞作品は
こちらをご覧ください

